

原 著

子どもの心の理論発達と母親の愛着スタイルの関連性

日本とスリランカの比較

久崎孝浩

The relation between preschoolers' developmental level of theory of mind and their mothers' attachment style: A comparison between Japanese and Sri Lankan data

Takahiro HISAZAKI

本研究は、母親の愛着スタイルと子どもの心の理論発達との関連性について日本とスリランカの違いを検討した。日本の調査では、131名の3～6歳の子どもが心の理論5課題に取り組み、その子どもの母親60名が愛着スタイルに関する項目に回答した。スリランカの調査では、70名の3～6歳の子どもが心の理論5課題に取り組み、その子どもの母親29名が愛着スタイルに関する項目に回答した。その結果、まず、スリランカでは母親の見捨てられ不安の強さや愛着とらわれ型の強さは子どもの心の理論発達と正の関連があるのに対して、日本ではそうした関連は認められなかった。また、スリランカでは母親の愛着恐れ型の強さは子どもの心の理論発達と正の関連があるのに対して、日本では負の関連を示すことが明らかになった。このことから、スリランカの恐れ型の母親が子どもに混乱を招くようなやりとりを展開するのに対して、日本の恐れ型の母親は子どもとのやりとりで抑制的に振舞うという、母親の行動パターンの違いが示唆された。

キーワード：心の理論、幼児期、スリランカ、母親の愛着スタイル、恐れ型

問題と目的

心の理論

子どもの成長過程において他者の心を読み取ることはいつごろから可能になるのであろうか。発達心理学においては子どもの心の読み取りは“心の理論 (theory of mind)” という枠組みで検討されてきた。その中でよく取り上げられる誤信念課題 (Baron-Cohen, Leslie, & Frith, 1985; Wimmer & Perner, 1983) は、自分が知覚した現実とは異なる他者の誤った信念を理解しているか否かをみるものである。Wellman, Cross, & Watson (2001) による誤信念課題研究のメタ分析では、生後44ヶ月になると50%以上の子どもが誤信念課題を通過することを明らかにしている。

しかし、心とは知覚や信念にとどまるものではない。人の心は複数の心的要素の連動によって成り立つものであり (Astington, 2003), ある種の感情は特定の欲求を生み出したり、その欲求は特

定の刺激や出来事への注意・知覚を促して信念を形成したり、その信念が具体的な行動を引き起こして期待どおりになるかならないかによって特定の感情が生じたりする。すなわち、他者の心の読み取りを検討するとき、他者の知覚や信念だけでなく欲求や感情までも読み取っているかどうかが重要になってくる。他者の欲求や感情に関する子どもの読み取りについてはどのような形で検討されてきたのであろうか。例えば、Repacholi & Gopnik (1997) は、子どもはいつごろから自己の欲求や感情とは異なる他者のそれらを推測できるかを検討している。実験者がブロッコリーとクッキーのうち1つに対して嫌悪を、もう1つに対して喜びを表出する様子を生後14ヶ月と18ヶ月の子どもに見せて、その表出後に実験者が2種類の食べ物を用意して子どもに要求するという、“食べ物要求課題 (food-request procedure)” を考案している。この課題のポイントは、子どもが

好きなクッキーに対して実験者も喜びを表すという好み一致の場合と子どもが嫌いなブロッコリーに対して実験者が喜びを表すという好み不一致の場合とで、子どもの応答の仕方はどう異なるかというところにある。Repacholi & Gopnik の結果では、生後14ヶ月の子どもでは好み一致の場合も好み不一致の場合も同じように実験者にクッキーを渡す子どもが多かった。しかし、生後18ヶ月の子どもでは、好み一致の場合には実験者の要求にクッキーを渡すが、好み不一致の場合にはブロッコリーを渡す子どもが多かった。この結果から、1歳半頃には、子どもは自分自身の好みや欲求とは別に他者の好みや欲求を推測できるようになることが示唆される。こうしてみると、心のどの要素に着目するかによって、自己とは異なる他者の心の読み取りの発達レベルは異なってくるのが推測される。

そこで、Wellman & Liu (2004) は、他者の欲求、信念、知覚、誤信念、感情それぞれを自己の視点や現前の事実とは異なる他者の視点から理解しているか否かを測定する一連の課題を考案している。課題は人形を使って物語を子どもに説明し、その人形の欲求、信念、知覚、誤信念、感情を正しく答えることができるかをみるものである。そしてこの一連の課題に参加した3～5歳の子どもの80%が、欲求の理解、信念の理解、見ることと知ることの関係の理解、誤信念の理解、本音と見かけの感情の違いの理解の順で課題を通過していく（加齢とともに通過する課題はガットマン・スケール上にあり、難度の高い課題を通過した子どもは必ずそれよりも難度の低い課題全てを通過している）ことを実証している。さらに東 (2007) は、この一連の課題の日本への適用可能性を検討し、調査に参加した子どもの70%がガットマン・スケールによる通過パターンを示した。この70%という結果は Wellman & Liu (2004) の80%という結果に比べると若干低いが、これは東 (2007) の調査に参加した子どもの一部が Wellman & Liu (2004) で2番目の難度で設定されている信念理解の課題のみを通過できずに、ガットマン・スケールの通過パターンを示さなかったためである。こうした日米の結果の多少の違いはあるものの、本研究では、この Wellman & Liu (2004)

の一連の課題を用いて子どもの心の理論発達レベルを検討することにした。

心の理論発達の遅早の理由

しかし、子どもは加齢とともに難度の高い心の理論課題を通過するといっても、一部の子どもは通過するであろう年齢に達しても通過しなかったり、一方で低年齢でも通過したりもする。そのような発達の早さあるいは遅さの背後にはおそらく理由があるはずである。その理由の1つを親子関係に求めることができるかもしれない。Fonagy, Redfern, & Charman (1997) や Meins, Fernyhough, Russell, & Clark-Carter (1998) は、子どもの愛着の安定性がその子どもの心の理論課題の成績の良さと関連したり予測したりすることを明らかにしている。例えば Fonagy et al. (1997) は、3～6歳の子どもを対象に分離不安テスト（子どもと親が分離する場面を示した絵を見せ、対象児にその子どもの感情や自分自身がその状況になったときの感情について尋ねて、対象児の言語反応を整理・分類して愛着の安定性をカテゴリカルに把握する）を実施して愛着の安定性を調べ、また他者の信念を依拠してその他者の感情を推測できるか否かの課題 (Harris, Johnson, Hutton, Andrews, & Cooke, 1989) を実施した。その結果、子どもの年齢、言語能力、社会的成熟度を統計的に統制しても、愛着安定型の子どもは不安定型の子どもに比して感情推測課題の通過率が有意に高かった。また、Meins et al. (1998)、生後1歳の時点で愛着の安定性の計測のためにストレンジ・シチュエーションを実施した子どもが4歳になったときに Wimmer & Perner (1983) の誤信念課題を実施し、その他にも、家族の社会的地位、生後30ヶ月時点でふり遊びの能力、3歳時点で母親の感受性や子どもへの心的発話、5歳時点で感情推測課題を実施した。探索的にパス解析をした結果、1歳時点での子どもの愛着の安定性が誤信念課題の通過を有意に予測した。こうした結果は、愛着の安定性をもたらす養育者側の要因が子どもの心の理論発達を推進させているのだろうという1つの考えを示唆するだろう。例えば、Meins (1997) は、養育者が幼い子どもの行動を心的に解釈してそれに沿った発話や応対を子どもに向けるという“心を気づかう傾向 (mind-

mindedness)”という養育者の特性を取り上げ、それが子どもの心的概念や自他の心の相違への気づきをもたらしているのではないかと仮定している。この仮説は Meins, Fernyhough, Wainwright, Das Gupta, Fradley, & Tuckey (2002) や篠原 (2011) の研究によって実証されており、双方の研究ともに、幼い子どもに対する心的状態の言及の多さがその後の子どもの心の理論課題の成績の良さに関与することを明らかにしている。しかも Meins et al. (2002) では、母親の心的言及の多さが子どもの愛着安定性を予測すること、さらに心的言及の多さは子どもの心の理論課題の成績の良さを予測するが、子どもの愛着安定性はそれを予測しないことを示している。このように、養育者側の要因の中でも、“心を気づかう傾向”のような、子どもの心的世界に焦点化しようとする姿勢は、子どもの心の理解の能力の発達に直接的に影響を与えるものとして近年重要視されている。

心の理論発達に関与する愛着形成

しかし、Meins et al. (1998, 2002) は親子関係の中で育まれる子どもの愛着スタイルが直接的に心の理論の獲得を規定しないことをも報告しており、Ontai & Thompson (2002) や Symons & Clark (2000) の研究においても、養育者との日常のやりとりにおける行動の評価に基づく愛着Qソート法 (Waters & Deane, 1985) によって測定された愛着の安定性が幼児期の心の理論課題の成績の良さを予測しないという結果が示されている。ここにおいて、子ども自身の愛着形成は心の理論の獲得に直接関係がないと考えてよいのであろうか。これに関して、Fonagy, Gergely, Jurist, & Target (2002) は、子どもの愛着形成と心の理解の発達との関連を強く否定できない論を提示している。感受性の高い養育者は子どもを心ある主体として捉えて時々刻々と変化する子どもの心的状態を読み取るため、その養育者のもとで安定した愛着を形成した子どもは安心して養育者の行動からその心的状態を読み取ることができるという。しかし、愛着回避型の子どもは拒絶的な養育者を遠ざけるために、愛着抵抗型の子どもは養育者の気まぐれな行動ゆえに生じる自分自身の混乱や苦痛に注意が向いてしまうために、養育者の心的状態を読み

取ることは幾らか困難であろうという。乳幼児期の子どもにとっての重要な他者である養育者との関係が安定していなければ、養育者の心的状態を適当な形で理解することは難しく、ひいては他者一般の心を理解することが難しくなるということは至極当然の発達の経過として在りうることではないだろうか。こうした考えに従えば、愛着安定型の子どもに比べて回避型や抵抗型の子どもにおいては他者の心の理解が難しいあるいは発達の遅れるということになる。

また、Fonagy et al. (2002) によれば、養育者とのやりとりが子どもの心の理解の発達を促す上で、子どもが養育者の心の中に自己像をいかに見出すかということが重要だという。養育者とのやりとりの中で子どもがその養育者の心を読み取るということは、養育者が子どもをどのように感じ取りみているかをも子ども自身が理解するということである。愛着安定型、回避型、抵抗型の子どもは、日頃の養育者の振る舞いややりとりから、形はどうあれ、養育者が自分自身を何らかの関心をもってみていることを理解し、養育者と自分自身の心をつなげて理解していくという。しかし、愛着無秩序型の子どもは他の愛着タイプとは一線を画し、養育者の心の中に自己像を見出しにくいという。そして無秩序型の子どもは、その養育者が子どもに怯えまた怯えさせる振る舞いをするために、自分自身の安心を確保するためだけに養育者の心に極めて敏感になりその行動を予測しようとするため、自己像と結びつけることなく養育者の心を理解していくことになるという。すなわち、愛着無秩序型の子どもは養育者ひいては他者の心の理解を十分に発達させるが、その理解のあり方は自己像や経験から切り離された理論的な理解・予測に留まるもので、他者との心の交流を生むようなものではない可能性があるのである。こうした Fonagy et al. (2002) の論は、心の理解を単なる他者の心の推測ではなく自己理解あつての他者の心の理解としてその発達の様相を解明しようとしている点で重要な意味がある。

心の理論の発達に及ぼす文化

また愛着の影響とは別に、近年、心の理論の獲得時期や獲得される内容について調査した国による違いが認められるようになってきた。例えば、

日本の子どもは欧米の子どもに比べて、心の理論課題に正答する年齢が遅いことが知られている (Naito & Koyama, 2006; 東山, 2007; Wellman et al., 2001)。例えば、先方で紹介した東山 (2007) の研究では、心の様々な要素の理解に関する一連の課題において、同様の調査をした Wellman & Liu (2004) の結果と比較すると信念の理解や誤信念の理解の課題の子ども全体の通過率が20%近く下回り、年齢別にみても信念の理解の課題の通過率は3歳児より4歳児のほうが幾分下回り、誤信念の理解の課題の通過率は4歳児でも30%に達する程度であった。信念の理解の課題や誤信念の理解の課題は登場人物が何を知っているか・考えているかを子どもに問う課題であるが、東山 (2007) は日本の子どものこうした課題の通過率の低さが、“考える”や“知っている”などの心的動詞の使用が日常的に少ないという言語的環境に依拠するのではないかと考察している。また、ドイツ、コスタリカ、カメルーンの子どもの心の理論の発達を検討した Chasitotis, Kiessling, Campos, & Hofer (2006) の結果においては、ドイツとコスタリカよりもカメルーンの子どもの成績が低くなることが示されている。Chasitotis et al. (2006) は、この結果が、カメルーンの養育者は子どもが従順で抑制的であることを望んでおり、それが心的状態について話し合うような養育者と子どものコミュニケーションを減少させて、結果的に子どもの心の理論課題の成績が低くなるという可能性を表していると考察している。すなわち、言語的環境の文化差とは別に、養育者と子どもの関係に関する文化差が心の理論の発達に影響を及ぼすのではないかと考察している。小川 (2011) は、日本とイギリスの子どもの心の理論発達を比較した研究の結果、子どもが知っている事実に対して他者の誤った信念を理解できるかを問う誤信念課題では正答率に差がなかったものの、だまし箱課題ではイギリスの子どもの正答率が日本の子どもよりも高いことを報告している。だまし箱課題は、自分自身の信念とは異なる他者の信念を子どもに推測させる課題である。小川 (2011) は、この結果について、心的動詞が明確に表現されないという日本の言語環境の影響に加えて、“先回り”や“思いやり”といった言葉に代表されるよ

うな、他者の心を察することを重んじる日本の文化では、子どもが自分自身の心的状態を表明する前に養育者がそれを察して先回りの行動してしまうことが多いために、子どもが自分自身の心的状態を内省したり推測したりする機会を少なくし、自他の信念の違いの理解を難しくさせるという可能性をも述べている。以上のように、心の理論発達の遅早や質的差異には文化差が見られるが、それは言語的環境の文化差だけでなく、養育環境・養育観の文化的差異を反映している可能性が示唆されている。

心の理論発達の文化差に愛着形成のあり方が関与する可能性

先方で述べたように、愛着形成のあり方が心の理論発達に影響を及ぼす可能性があるならば、心の理論発達の文化差に愛着形成の文化差が関与している可能性も否定できないであろう。愛着の文化差については、メタ分析によって、ドイツ、イギリス、オランダ、スウェーデンといったヨーロッパの国々では愛着回避型が相対的に多く、イスラエルや日本では愛着抵抗型が相対的に多いことがこれまでに示されており (van IJzendoorn & Kroonenberg, 1988)、愛着の特定のタイプの多さが国によって異なることの背景にその国や文化に根ざした養育観や養育行動が大きく関わっていることは確かであろう。したがって、心の理論発達の文化的な差異にも愛着形成や親子関係の文化的差異が関わっていることが想定される。

本研究の目的

こうした論の流れからすると、子どもの愛着タイプや親子関係のあり方と心の理論発達との関連性に関する文化的差異を検討することが本研究の直接的な目的になるが、本研究では子どもの愛着タイプや親子関係を測定せずに、それらを反映すると思われる養育者の愛着スタイルを測定して検討した。そのようにした理由の1つは、例えばストレンジ・シチュエーションによる愛着タイプの測定には母親の参加および設備の充実が必要不可欠であり、筆者側の準備が不十分であったこともある。2つ目は、養育者自身の愛着の影響のもと、それと同様の愛着パターンが子どもにも伝達される傾向があることが明らかになっており (数井・遠藤・田中・坂上・菅沼, 2000; van IJzendoorn,

1995), 養育者の愛着が養育者自身の行動を通じて子どもにおける愛着形成のみならず心の理解や社会的スキルにも影響する可能性があるかもしれないからである。

また、筆者は今回、スリランカにおいて子どもの心の理論獲得に関する調査の機会を得た。スリランカはインドの南方にある島国で、20世紀半ばにイギリスから独立した共和制国家である。スリランカの経済については、スリランカ政府の財政省が発刊した2010年の年報 (Ministry of Finance, Sri Lanka, 2011) によれば、サービス部門が国内総生産の6割を占め、鉱工業部門が28%、農業部門が12%であり、一人あたりの国内総生産は2005年から5年間で約2倍に成長し、経済的に発展してきている。また、国民の多くはシンハラ語またはタミル語を使用し、国民の70%近くが仏教徒である。特筆すべきなのがスリランカの教育であり、初等教育から高等教育まで無償で提供され、識字率は92.5%という高い値である (Ministry of Finance, Sri Lanka, 2011)。初等教育の開始すなわち小学校入学の年齢は5歳からであり、幼児教育についてもプリ・スクール (pre-school) という幼稚園施設で3から5歳を対象とした教育が実施されている。そしてこうした幼稚園では、具体的に何かを教えるというよりも、その後の小学校でスムーズに生活を送ることができるように多様な体験によって子どもの全体的な発達を促すことが目標とされている (Ministry of Human Resource Development, Education & Cultural Affairs, Sri Lanka, 2004; 清水・坪川, 2007)。また、受け入れている子どもの人数が50人未満の幼稚園がかなり多く、100人を超える子どもを抱えた大規模な幼稚園は非常に少なく (Ministry of Human Resource Development, Education & Cultural Affairs, Sri Lanka, 2004)、明確な設置基準もなく誰でも幼稚園を開設するために専門的な知識がないまま開園されているケースも多いという (清水・坪川, 2007)。このように、スリランカのプリ・スクールと呼ばれる幼稚園は日本の幼稚園に比べると教育学的専門性や設置環境という点ではかなり異なるところがある。何故日本の比較対象として多くある国の中からスリランカを選択したのかについて述べるとすれば、スリラン

カ固有の文化に関心があるものの、スリランカの子育て観・教育観を背景にした子どもの心の理解の発達が日本のそれとは異なる独特の軌跡を辿り、特異な養育環境の影響を受けることを具体的に予期したからではない。したがって、スリランカの子どもたちの心の理解の発達が日本のそれとどのように異なるのか、また日本とは異質のスリランカ固有の養育環境が子どもの心の理解の発達にどのように作用するのかについて明確な仮説はない。そこで本研究では、子どもの心の理論発達に関する日本とスリランカの差異、および養育者の愛着スタイルと子どもの心の理論発達との関連性に関する両国間の差異について探索的に検討する。

方法

参加者

日本の調査では、幼稚園または保育所に通っている子ども (総勢131名、男児73名、女児58名、平均62.6ヶ月、レンジ41~79ヶ月、3歳児6名 (平均44.0ヶ月、レンジ41~47ヶ月)、4歳児41名 (平均55.0ヶ月、レンジ48~59ヶ月)、5歳児63名 (平均65.6ヶ月、レンジ60~71ヶ月)、6歳児21名 (平均73.8ヶ月、レンジ72~79ヶ月)) とその保護者が調査に参加した。調査に参加した幼稚園と保育所はいずれも通園児100名を超えていた。

スリランカの調査では、スリランカの小学校入学が日本の小学校入学よりも1年早いので、幼稚園または小学校に通っている子ども (総勢70名、男児45名、女児35名、平均61.3ヶ月、レンジ39~83ヶ月、3歳児14名 (平均43.1ヶ月、レンジ39~47ヶ月)、4歳児17名 (平均52.9ヶ月、レンジ48~58ヶ月)、5歳児20名 (平均65.4ヶ月、レンジ60~71ヶ月)、6歳児19名 (平均77.8ヶ月、レンジ72~83ヶ月)) とその保護者が調査に参加した。幼稚園は大都市コロombo市近郊の町中にあり、通園児は50名に満たない。子どもの多くが親の就労目的で通園しているのか、それとも子どもの学習や小学校へのスムーズな移行を考慮して親が通園させているのかは不明であるが、幼稚園での活動では英語の授業や数の概念を理解する授業など教育的活動が含まれていた。

手続き

日本の調査では、まず、幼稚園園長あるいは保育所所長および参加予定の子どもが在籍しているクラスの担任となる教員あるいは保育士に調査の趣旨・目的や倫理的配慮について説明し、調査協力への了承を得た。その後、調査の趣旨・目的や調査上の倫理的配慮について記載された書面を参加予定の子どもの保護者に配布し、了承が得られた保護者とその子どもが調査に参加した。子どもに対しては、借りた一室において研究協力者である学生1名の協力のもとで心の理論課題が実施された。保護者に対しては、愛着スタイルに関する項目が盛り込まれた質問紙を配布し、1週間後に回収した。

スリランカの調査では、まず、筆者と研究協力者であるスリランカ出身の学生1名が調査予定の幼稚園と小学校を訪問した。そして、園長または校長と主任教員に調査の趣旨・目的や倫理的配慮について説明し、調査協力への了解を得た。その後、調査の趣旨・目的や倫理的配慮についてシンハラ語で書かれた書面を用意し、それを保護者に配布し、了承が得られた保護者とその子どもが調査に参加した。子どもに用意された心の理論課題は、幼稚園の場合には教室を借りて個別に行われ、小学校の場合でも小さな教室を借りて個別に実施された。スリランカの子どもたちに対する心の理論課題は、子どもに課題の意図を十分に伝える必要があるため、研究協力者であるスリランカ出身の学生によって行われた。保護者には、愛着スタイルに関する項目をシンハラ語に訳した質問紙を配布し、約1週間後に回収した。

心の理論課題

Wellman & Liu (2004) が考案した心の理論5課題を実施した。この5課題は、Wellman & Liu (2004) だけでなく、本邦でも東山 (2007) によって概ねガットマン尺度として構成されることが確認されている。5つの課題は (1) 主観的欲求、(2) 主観的信念、(3) 知識アクセス、(4) 誤信念、(5) 見かけの感情理解である。各課題では、子どもに提示される物語上の登場人物が真にどのような欲求、感情、信念、知識を抱いているかを尋ねるターゲット質問が準備されており、その質問に正答すると課題を通過したとみなされる。ま

た、ターゲット質問で答えた内容をどのように理由づけているかをみるための理由質問、子どもがどのように記憶しているかを確認するための記憶質問なども課題内に用意されている。各課題の詳細な内容は以下のとおりである。

(1) 主観的欲求の課題：ニンジンとクッキーを使い、子どもにどちらが好きか尋ね（自己欲求質問）、人形はそれと反対の方を好きだと知らせ、登場人物はどちらを食べたいと思うかを問う（ターゲット質問）。ターゲット質問で、子どもの好みのものとは違う食べ物を登場人物は欲していると答えた場合に、この課題を通過したものとみなす。

(2) 主観的信念の課題：テーブルとイスを使い、子どもに猫がテーブルかイスのどちらに隠れているか推測させ（自己信念質問）、人形はそれと反対の方に猫が隠れていると思っている事を伝え、登場人物が猫を見つけるためにどこを探すかを問う（ターゲット質問）。またその理由を問う（理由質問）。ターゲット質問で、子どもが考えていたネコの隠れ場所とは異なる場所を登場人物は探そうとすると答えた場合に、この課題を通過したものとみなす。

(3) 知的アクセスの課題：箱を使い、箱の中に犬が入っていることを子どもに見せ、それを見ない人形は箱の中身を知っているかを問う（ターゲット質問）、またその理由を問う（理由質問）。最後にもう一度、人形は中身を知っているかを問う（記憶質問）。ターゲット質問で、子どもが人形は箱の中身を知っていないと答えた場合に、この課題を通過したものとみなす。

(4) 誤信念の課題：クッキーの缶を使い、クッキーの箱の中にウサギが入っていることを子どもに見せ、それを見えていなかった登場人物が箱に何が入っているというかを問う（ターゲット質問）、またその理由も問う（理由質問）。最後にもう一度、人形は箱の中身を知っているかを問う（記憶質問）。ターゲット質問で、登場人物は箱にはクッキーが入っていると思っていると答えた場合に、この課題を通過したものとみなす。

(5) 内実と見かけの感情理解の課題：友達に意地悪された登場人物の人形が、自分の本当の気持ちを知られると弱虫と言われてしまうので、本当

の気持ちを隠そうとして心と表情を変えていることを子どもに話す。3枚の表情カード（喜び、悲しみ、中性）を使い、登場人物はどんな気持ちか（感情質問）、どんな表情をしているか（表情質問）を問う。またその理由も問う（理由質問）。感情質問で悲しみを選んだ後に感情質問で中性が喜びを選んだ場合、あるいは感情質問で中性を選んだ後に感情質問で喜びを選んだ場合に、この課題を通過したものとみなす。

また、課題の得点化に関しては、単に各課題を通過したか否かを把握するだけでなく、心の理論発達レベルを把握するために、各課題を通過した場合に1点与えて5課題を合計した心の理論得点（0～5点）も算出した。

保護者の愛着スタイルに関する質問紙

質問紙は愛着スタイルに関する3つの設問で構成された。第1設問は、ECR-GO日本語版（中尾・加藤，2004）を引用して作成した、一般他者に対する親密性の回避に関する18項目と見捨てられ不安に関する12項目である。第2設問は、RQ-GO日本語版（中尾・加藤，2004）を参考にして作成した、4つの愛着スタイル（安定型、回避型、とらわれ型、恐れ型）それぞれの特徴が示された4項目である。第1設問と第2設問での回答形式は7件法（“1. 全く当てはまらない”～“4. どちらも当てはまらない”～“7. 非常によく当てはまる”）である。最後の第3設問は、第2設問で示された4つ愛着スタイルのうちどれが自分に最もあてはまるかを回答する強制選択式の項目である。質問紙を受け取った保護者はこれら3つの設問に回答した。

スリランカでの調査においては、研究協力者であるスリランカ出身の日本留学生が質問紙内の文章や項目内容を母国公用語であるシンハラ語に翻訳し、翻訳したものをその学生と筆者で話し合いながら修正・確認した。そして、幼稚園または小学校教員がシンハラ語訳の質問紙を保護者に配布し、1週間後に回収した。

質問紙から得られたデータについては、親密性の回避に関する18項目の項目平均点を親密性回避得点とし、見捨てられ不安に関する12項目の項目平均点を見捨てられ不安得点とした。また、4つの愛着スタイルそれぞれの回答をそのまま、安定

型得点、回避型得点、とらわれ型得点、恐れ型得点として使用した。

結果

日本とスリランカにおける心の理論課題の通過率

通過率の検討の前に、心の理論の5つの課題全てに取り組みなかった、あるいは状況によって取り組みなかった子どもたちのデータは分析対象から除外した。その結果、日本の3歳児のサンプル数は6名、スリランカの3歳児のサンプル数は1名となった。このようなサンプル数は数値要約による比較や統計的分析に堪えうるものではないと判断して、3歳児のデータも分析対象としなかった。最終的に、日本では4歳児37名（男児19名、女児18名、平均54.8ヶ月）、5歳児61名（男児34名、女児27名、平均65.6ヶ月）、6歳児21名（男児10名、女児11名、平均73.8ヶ月）が、スリランカでは4歳児6名（男児2名、女児4名、平均52.8ヶ月）、5歳児14名（男児8名、女児6名、平均66.6ヶ月）、6歳児19名（男児9名、女児10名、平均77.8ヶ月）が分析の対象となった。

まず、日本とスリランカそれぞれでの年齢による各課題の通過率の違いを検討した。Figure 1は日本での調査における年齢ごとにみた心の理論課題の通過率を、Figure 2はスリランカでの調査における年齢ごとにみた課題の通過率を示している。Figure 1・2をみると、まず、日本とスリランカともに、主観的欲求の課題の通過率は年齢にほぼ関係なく高いことがわかった。また、日本とは違ってスリランカの子どもでは、6歳児でも主観

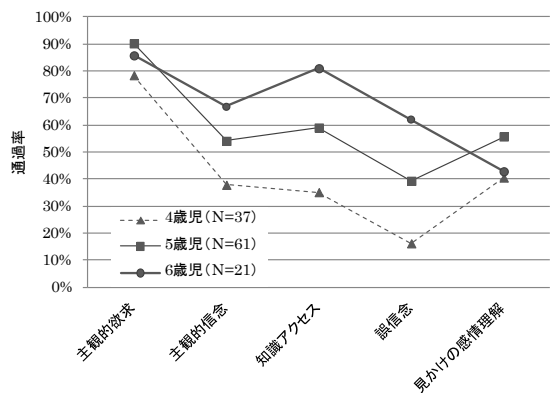


Figure 1 日本における心の理論課題の通過率

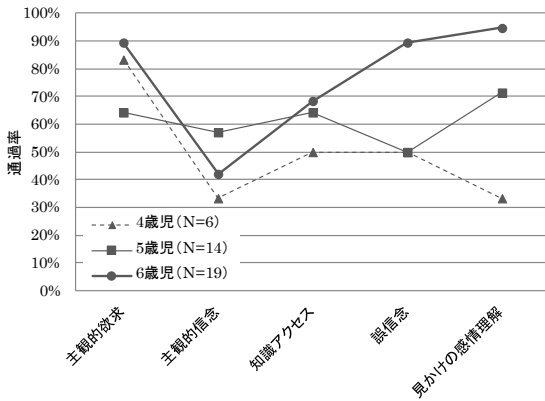


Figure 2 スリランカにおける心の理論課題の通過率

的信念の課題は難しいようで通過率は50%に満たなかった。さらに、全体的にみると、日本の子どもでは、想定される課題の難度に沿って通過率が低くなっていく傾向があるが、スリランカの子どもでは特にそのような通過率低下は見られず、6歳児で誤信念の課題や見かけの感情の課題の通過率が飛躍的に高くなることがわかった。

また、5課題についてガットマン・スケールの通過パターンを検討した。ガットマン・スケールは、各課題に難易度があるとするならば、ある個人がある課題に正答したとすると、理想的にはその課題よりも難易度の低い課題はすべて正答しており、その課題よりも難易度の高い課題はすべて誤答していると考えられる理論的な尺度である。5つの課題に難易度があるならば、その正答・誤

Table 1 心の理論5課題のガットマン・スケールの回答パターンに合致した子どもの人数

	パターン1	パターン2	パターン3	パターン4	パターン5	パターン6	他のパターン	合計
主観的欲求	-	+	+	+	+	+		
主観的信念	-	-	+	+	+	+		
知識アクセス	-	-	-	+	+	+		
誤信念	-	-	-	-	+	+		
見かけの感情	-	-	-	-	-	+		
本研究の調査結果								
日本の調査対象 (人)								
4歳児	2	3	6	0	0	1	25	37
5歳児	1	6	3	1	8	5	37	61
6歳児	0	1	0	2	3	6	9	21
合計人数	3	10	9	3	11	12	71	119
スリランカの調査対象 (人)								
4歳児	0	1	0	0	0	1	4	6
5歳児	1	1	0	0	1	3	8	14
6歳児	0	0	0	0	0	4	15	19
合計人数	1	2	0	0	1	8	27	39
東山 (2007) の調査結果								
3歳児	4	9	8	5	0	0	4	30
4歳児	1	6	5	2	4	0	12	30
5歳児	0	0	3	3	11	1	12	30
6歳児	0	0	1	2	12	7	8	30
合計人数	5	15	17	12	27	8	36	120
Wellman & Liu (2004) の調査結果								
3歳児	1	2	8	4	1	0	9	25
4歳児	0	2	3	2	9	5	4	25
5歳児	0	0	0	2	9	12	2	25
合計人数	1	4	11	8	19	17	15	75

答のパターンは Table 1 にも示されているように、全課題誤答のパターン 1 から全課題正答のパターン 6 までとなる。可能なすべての回答パターン $2 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2$ (32) 通りのうちガットマン・スケール上の回答パターン 6 通りのどれかに当てはまる個人がどの程度いるかによって再現性の推定値が算出されて、ガットマン・スケールの確かさが検討される。Wellman & Liu (2004) においては Table 1 に示しているように、パターン 1 は 1 名、パターン 2 は 4 名、パターン 3 は 11 名、パターン 4 は 8 名、パターン 5 は 19 名、パターン 6 は 17 名で、その合計は 60 名であり、全体 75 名の 80% を占めていた。グリーン法による再現性係数は .96 という高い値 (.90 以上であれば再現性が保障される) を示した。また、東山 (2007) も同様の分析を行い、再現性係数は算出していないものの、ガットマン・スケールの回答パターンを示した子どもの人数は全体 120 名中 84 名 (70%) で、Wellman & Liu (2004) に比べるとやや低いものであった。本研究でもガットマン・スケールの回答パターンを示した子どもが何人いるかを日本と

スリランカそれぞれで検討したが、その結果は Table 1 のようになった。日本の調査では全体 119 名中 48 名 (40.3%) の子どもが、スリランカの調査では全体 39 名中 12 名 (30.8%) の子どもがガットマン・スケールの回答パターンを示した。この結果は、東山 (2007) の 70% や Wellman & Liu (2004) の 80% という結果よりかなり低いもので、ガットマン・スケールに沿わないその他の回答パターンを示した子どもが多いことが明らかであった。このような結果になった理由の 1 つとして、子どもたちにとって特定の課題を通過しにくかったということがあるかもしれない。そこで続いて、それを明らかにするための分析を行った。

日本とスリランカそれぞれの調査における課題通過の成否に対して年齢、性別、課題内容がどのように関係しているかを検討するために、まず Table 2・3 にあるように、年齢、性別、課題ごとに課題通過率を算出した。そして通過率を逆正弦変換して、年齢 (3 : 4 歳, 5 歳, 6 歳) \times 性別 (2 : 男児, 女児) \times 課題 (5 : 主観的欲求, 主観的信念, 知識アクセス, 誤信念, 見かけの感

Table 2 日本の調査における心の理論 5 課題それぞれの男女別の通過率

	4 歳児			5 歳児			6 歳児			課題平均
	男児 (n=19)	女児 (n=18)	男女合同 (n=37)	男児 (n=35)	女児 (n=26)	男女合同 (n=61)	男児 (n=10)	女児 (n=11)	男女合同 (n=21)	
主観的欲求	84.2%	72.2%	78.4%	91.2%	88.9%	90.2%	70.0%	100.0%	85.7%	85.7%
主観的信念	31.6%	44.4%	37.8%	52.9%	55.6%	54.1%	60.0%	72.7%	66.7%	51.2%
知識アクセス	31.6%	38.9%	35.2%	47.1%	74.1%	58.6%	80.0%	81.8%	80.9%	55.3%
誤信念	15.8%	16.7%	16.2%	29.4%	51.9%	39.0%	50.0%	72.7%	61.9%	36.0%
見かけの感情	42.1%	38.9%	40.5%	61.8%	48.1%	56.0%	50.0%	36.4%	42.9%	48.9%
サンプル平均	41.1%	42.2%	41.6%	56.5%	63.7%	59.6%	62.0%	72.7%	67.6%	55.4%

Table 3 スリランカの調査における心の理論 5 課題それぞれの男女別の通過率

	4 歳児			5 歳児			6 歳児			課題平均
	男児 (n=2)	女児 (n=4)	男女合同 (n=6)	男児 (n=8)	女児 (n=6)	男女合同 (n=14)	男児 (n=9)	女児 (n=10)	男女合同 (n=19)	
主観的欲求	100.0%	75.0%	83.3%	75.0%	50.0%	64.3%	88.9%	90.0%	89.5%	74.7%
主観的信念	50.0%	25.0%	33.3%	75.0%	33.3%	57.1%	55.6%	30.0%	42.1%	47.1%
知識アクセス	50.0%	50.0%	50.0%	50.0%	83.3%	64.3%	66.7%	70.0%	68.4%	60.6%
誤信念	0.0%	75.0%	50.0%	37.5%	66.7%	50.0%	100.0%	80.0%	89.5%	57.0%
見かけの感情	50.0%	25.0%	33.3%	75.0%	66.7%	71.4%	88.9%	100.0%	94.7%	63.7%
サンプル平均	50.0%	50.0%	50.0%	62.5%	60.0%	61.4%	80.0%	74.0%	76.9%	60.6%

情)の3要因に関して χ^2 分布を利用した分散分析を行った。その結果、まず日本の調査では、年齢の主効果および課題の主効果が有意であった(年齢の主効果: $\chi^2=13.27$, $df=2$, $p<.01$; 課題の主効果: $\chi^2=9.02$, $df=4$, $p<.01$)。それ以外の主効果や交互作用は有意でなかった。年齢の主効果についてはさらにライアン法による多重比較を行ったところ、4歳児よりも5歳児($\chi^2=13.31$, $df=1$, $p<.05$)、4歳児よりも6歳児($\chi^2=24.74$, $df=1$, $p<.05$)のほうが有意に心の理論課題を通過しやすいことが明らかになった。また、課題の主効果が有意であったのでさらにライアン法による多重比較を行ったところ、主観的欲求課題は他の課題に比べて有意に通過しやすいことが明らかになった(主観的欲求-主観的信念: $\chi^2=24.92$, $df=1$, $p<.05$, 主観的欲求-知識アクセス: $\chi^2=16.24$, $df=1$, $p<.05$, 主観的欲求-誤信念: $\chi^2=49.54$, $df=1$, $p<.05$, 主観的欲求-見かけの感情: $\chi^2=35.29$, $df=1$, $p<.05$)。また、知識アクセス課題は誤信念課題よりも有意に通過しやすいことも明らかになった($\chi^2=9.05$, $df=1$, $p<.05$)。一方、スリランカの調査結果でも、同様に通過率を逆正弦変換して年齢×性別×課題の3要因に関する χ^2 分布を利用した分散分析を行ったが、特に有意な主効果や交互作用は認められなかった。

日本とスリランカにおける子どもの心の理論課題の通過と保護者の愛着スタイルの関連

まず、日本の調査では、保護者61名から回答された質問紙が回収された。そのうち、回答が抜け落ちていた1名の回答が除外されて、分析対象数は60名となった。また、スリランカの調査では、保護者34名から回答された質問紙が回収された。そのうち、回答が抜け落ちたものや回答者が母親以外のものである5名の回答が除外されて、分析対象数は29名となった。これらの回答データから、子どもの年齢や性別ごとに、子どもの心の理論得点の平均、母親のECR-GOの見捨てられ不安得点と親密性回避得点それぞれの平均、RQ-GOの安定型得点・回避型得点・とらわれ型得点・恐れ型得点それぞれの平均、強制選択式回答の内訳をTable 4・5に示した。子どもの年齢や性別が関与するかのかを検討するために、子どもの心の理論得点、母親の見捨てられ不安得点、親密性回避

得点、安定型得点、回避型得点、とらわれ型得点、恐れ型得点それぞれを従属変数として年齢(3)×性別(2)の分散分析を行った。まず、日本の調査結果において子どもの心の理論得点については、年齢の主効果が認められた($F(2,55)=7.84$, $p<.01$)。Holm法による多重比較の結果、4歳児の心の理論得点は5歳児や6歳児のものより有意に低かった。他の主効果や交互作用は有意でなかった。続いて、母親の見捨てられ不安得点については、特に有意な主効果や交互作用は認められなかった。母親の親密性回避得点については、子どもの性別の主効果が有意であり($F(1,55)=7.49$, $p<.01$)、女兒をもつ母親の親密性回避得点が男児をもつ母親よりも有意に高かった。その他の有意な主効果や交互作用は見られなかった。母親の安定型得点、回避型得点、とらわれ型得点、恐れ型得点それぞれについては主効果や交互作用は有意ではなかった。こうした結果から、日本の母親の愛着スタイルに関連した変数は一部子どもの性別と関連があったものの、子どもの年齢とは特に関連がないものと思われる。さらに、スリランカの調査結果において子どもの心の理論得点については、子どもの性別や年齢の主効果または交互作用が有意ではなかった。また、母親の見捨てられ不安得点、親密性回避得点、安定型得点、回避型得点、とらわれ型得点、恐れ型得点のどれにおいても、子どもの年齢や性別の主効果または交互作用は有意ではなかった。こうした結果から、スリランカの母親の愛着スタイルに関連した変数は子どもの年齢や性別とは特に関連がないものと思われる。

さらに、日本とスリランカそれぞれにおける心の理論課題通過と母親の愛着スタイルとの関連性を検討するために、母親の愛着スタイルに関連した変数である、ECR-GOの見捨てられ不安得点と親密性回避得点やRQ-GOの安定型得点・回避型得点・とらわれ型得点・恐れ型得点と心の理論課題の通過の有無やそれを合計した心の理論得点との相関係数を算出した。相関係数算出においては、先の分析でも見たように、母親の愛着スタイルに関連した変数は日本でもスリランカでも子どもの年齢と関連がないが、課題通過の有無は子どもの年齢と関連するため、子どもの月齢を統制して偏

Table 4 日本における子どもの年齢と性別ごとにみた心の理論得点と母親の愛着スタイル変数の平均 (SD) および強制選択式回答の人数

	子どもの心の理論得点	母親の ECR-GO		母親の RQ-GO (7件法)				母親の RQ-GO (強制選択式)				
		見捨てられ不安	親密性回避	安定型	回避型	とらわれ型	恐れ型	安定型	回避型	とらわれ型	恐れ型	
4 歳児	男児 (n=8)	2.13 (1.05)	2.78 (0.98)	3.08 (0.85)	4.88 (0.78)	2.13 (0.93)	2.75 (1.30)	3.25 (1.85)	6	0	1	1
	女児 (n=6)	2.00 (0.54)	2.57 (0.88)	3.65 (1.22)	3.72 (1.67)	2.14 (0.83)	2.29 (1.28)	3.42 (1.40)	3	0	1	2
	男女合同 (n=14)	2.07 (0.85)	2.69 (0.94)	3.35 (1.08)	4.33 (1.40)	2.13 (0.88)	2.53 (1.31)	3.33 (1.66)	9	0	2	3
5 歳児	男児 (n=22)	3.09 (0.95)	2.54 (0.87)	3.32 (0.68)	4.68 (1.72)	2.09 (1.20)	2.77 (1.62)	3.05 (1.89)	13	2	3	4
	女児 (n=14)	3.50 (1.30)	3.01 (0.79)	3.64 (0.66)	4.23 (1.42)	2.46 (1.22)	3.08 (1.07)	2.54 (1.22)	9	0	2	3
	男女合同 (n=36)	3.25 (1.11)	2.72 (0.87)	3.44 (0.69)	4.51 (1.63)	2.23 (1.22)	2.89 (1.45)	2.86 (1.69)	22	2	5	7
6 歳児	男児 (n=4)	3.50 (1.66)	2.71 (0.75)	3.42 (0.62)	4.50 (0.50)	2.50 (1.50)	2.00 (1.22)	2.50 (1.66)	3	0	0	1
	女児 (n=6)	3.50 (0.75)	2.69 (0.96)	4.76 (1.43)	3.50 (2.36)	2.83 (1.86)	2.00 (1.15)	5.00 (2.52)	2	0	0	4
	男女合同 (n=10)	3.60 (1.20)	2.70 (0.89)	4.23 (1.35)	3.90 (1.92)	2.70 (1.73)	2.00 (1.18)	4.00 (2.53)	5	0	0	5

Table 5 スリランカにおける子どもの年齢と性別ごとにみた心の理論得点と母親の愛着スタイル変数の平均 (SD) および強制選択式回答の人数

	子どもの心の理論得点	母親の ECR-GO		母親の RQ-GO (7件法)				母親の RQ-GO (強制選択式)				
		見捨てられ不安	親密性回避	安定型	回避型	とらわれ型	恐れ型	安定型	回避型	とらわれ型	恐れ型	
4 歳児	男児 (n=2)	2.50 (0.50)	4.50 (0.11)	3.13 (0.21)	6.50 (0.50)	3.00 (0.00)	5.50 (0.50)	6.00 (1.00)	0	0	0	2
	女児 (n=4)	2.50 (1.66)	3.50 (1.07)	2.96 (0.13)	5.00 (2.35)	2.50 (1.66)	3.50 (2.50)	4.75 (1.64)	3	0	1	0
	男女合同 (n=6)	2.50 (1.38)	3.83 (1.00)	3.01 (0.18)	5.50 (2.06)	2.67 (1.37)	4.17 (2.27)	5.17 (1.57)	3	0	1	2
5 歳児	男児 (n=6)	3.13 (1.54)	3.32 (0.81)	3.36 (0.67)	6.00 (0.93)	2.86 (1.96)	3.00 (1.51)	4.00 (1.93)	3	0	1	2
	女児 (n=3)	3.00 (1.63)	3.29 (0.72)	3.40 (0.32)	5.75 (0.43)	2.75 (0.43)	3.75 (2.28)	5.00 (1.22)	2	1	0	0
	男女合同 (n=9)	3.07 (1.58)	3.31 (0.78)	3.38 (0.57)	5.91 (0.79)	2.82 (1.59)	3.27 (1.86)	4.36 (1.77)	5	1	1	2
6 歳児	男児 (n=5)	3.88 (0.93)	3.50 (0.69)	3.40 (0.48)	5.00 (2.10)	3.20 (1.94)	3.00 (1.67)	3.00 (1.67)	3	1	1	0
	女児 (n=9)	3.7 (1.00)	3.01 (0.71)	3.38 (0.61)	4.89 (1.79)	3.00 (1.79)	3.50 (1.28)	4.70 (1.73)	5	1	1	2
	男女合同 (n=14)	3.78 (0.97)	3.17 (0.74)	3.38 (0.57)	4.93 (1.91)	3.07 (1.84)	3.33 (1.45)	4.13 (1.89)	8	2	2	2

相関係数を算出した (Table 6・7 参照)。

日本においては、Table 6にあるように、誤信念課題の通過と母親の安定型得点の高さとの間に有意な弱い正の相関、誤信念課題の通過と母親の回避型得点の高さとの間に有意な弱い負の相関、誤信念課題の通過と母親の恐れ型得点の高さとの間に有意な弱い負の相関が見られた。すなわち、母親の愛着スタイルが安定型であるほど子どもは

誤信念課題を通過しやすい、母親の愛着スタイルが回避型であるほど子どもは誤信念課題を通過しにくい、母親の愛着スタイルが恐れ型であるほど子どもは誤信念課題を通過しにくい、ということである。また、心の理論得点の高さと母親の恐れ型得点の高さとの間に有意な弱い負の相関が見られた。これは、母親の愛着スタイルが恐れ型であるほど子どもは心の理論課題の理解が難しいこと

Table 6 日本の子どもの心の理論課題通過と母親の愛着スタイル関連変数との偏相関係数(月齢を統制)

	ECR-GO		RQ-GO			
	見捨てられ不安	親密性回避	安定型	回避型	とらわれ型	恐れ型
主観的欲求	-.16	-.10	-.08	-.07	-.15	-.11
主観的信念	-.15	.01	-.06	.07	-.14	.03
知識アクセス	.24	-.08	.14	-.24	.10	-.19
誤信念	.03	-.09	.28*	-.32*	-.09	-.30*
見かけの感情理解	-.10	-.01	.14	.11	.02	-.14
心の理論得点	-.05	-.11	.20	-.19	-.11	-.31*

*p<.05, **p<.01

Table 7 スリランカの子どもの心の理論課題通過と母親の愛着スタイル関連変数との偏相関係数(月齢を統制)

	ECR-GO		RQ-GO			
	見捨てられ不安	親密性回避	安定型	回避型	とらわれ型	恐れ型
主観的欲求	.29	-.11	-.29	.32	.38*	.64**
主観的信念	.54**	.10	-.06	.14	.22	.03
知識アクセス	.34	.03	-.07	-.15	.45*	.52**
誤信念	.07	.31	-.26	-.04	.23	.12
見かけの感情理解	.09	.13	.37*	-.09	.07	.00
心の理論得点	.53**	.18-	.13	.07	.53**	.50**

*p<.05, **p<.01

を示す。それら以外に有意な相関関係は認められなかった。

一方、スリランカにおいては、Table 7に示したように、主観的欲求課題の通過と母親のとらわれ型得点の高さとの間に有意な弱い正の相関、主観的欲求課題の通過と母親の恐れ型得点の高さとの間に有意な中程度に強い正の相関、主観的信念課題の通過と母親の見捨てられ不安得点の高さとの間に有意な中程度に強い正の相関、知識アクセス課題の通過と母親のとらわれ型得点の高さとの間に有意な中程度に強い正の相関、知識アクセス課題の通過と母親の恐れ型得点の高さとの間に有意な中程度に強い正の相関、見かけの感情理解課題の通過と母親の安定型得点との間に有意な正の弱い相関が認められた。すなわち、母親の愛着スタイルがとらわれ型であるほど子どもは主観的欲求を通過しやすい、母親の愛着スタイルが恐れ型であるほど子どもは主観的欲求課題を通過しやすい、母親の見捨てられ不安が強いほど子どもは主

観的信念課題を通過しやすい、母親の愛着スタイルがとらわれ型であるほど子どもは知識アクセス課題を通過しやすい、母親の愛着スタイルが恐れ型であるほど子どもは知識アクセス課題を通過しやすい、母親の愛着スタイルは安定型であるほど子どもは見かけの感情理解課題を通過しやすい、ということである。また、心の理論得点の高さは、母親の見捨てられ不安得点の高さとの間に有意な中程度に強い正の相関関係、母親のとらわれ型得点の高さとの間に有意な中程度に強い正の相関関係、母親の恐れ型得点の高さとの間に有意な中程度に強い正の相関関係を示した。これらの結果は、母親の見捨てられ不安が強いほど子どもの心の理論課題の理解が進んでいる、母親の愛着スタイルがとらわれ型であるほど子どもの心の理論課題の理解が進んでいる、母親の愛着スタイルが恐れ型であるほど子どもの心の理論課題の理解が進んでいる、ということを示す。その他に有意な相関係数は見られなかった。

以上の偏相関係数の結果より、日本とスリランカの違いが認められた。まず、日本では母親の見捨てられ不安や親密性回避は子どもの心の理論課題の理解に関与していないが、スリランカでは母親の見捨てられ不安の強さが子どもの心の理論課題の理解を促す方向で関与していることが明らかになった。また、日本では母親の愛着スタイルの回避型の度合いの強さは子どもの誤信念課題の理解を難しくする方向で関与しているが、スリランカでは特にそうした関与は認められなかった。さらに、日本では母親の愛着スタイルのとらわれ型の度合いは子どもの心の理論課題の理解に関与していないが、スリランカでは母親の愛着スタイルのとらわれ型の度合いの強さは子どもの心の理論課題の理解を促す方向で関与していた。そして、母親の愛着スタイルの恐れ型の関与については日本とスリランカで大きな違いが認められ、日本では子どもの心の理論課題の理解を難しくする方向で関与するのに対して、スリランカでは心の理論課題の理解を促す方向で関与していた。

考 察

日本とスリランカにおける心の理論課題の通過率について

まず、本研究で調査した心の理論5課題はガットマン・スケールとして構成されることが確認されている（東山, 2007; Wellman & Liu, 2004）ため、ガットマン・スケール上の回答パターン6通りのいずれかに当てはまる子どもの人数を算出した。しかし、日本の調査では全体119名中48名（40.3%）の子どもが、スリランカの調査では全体39名中12名（30.8%）の子どもがガットマン・スケールの回答パターンを示し、ガットマン・スケールを再現するような結果ではなかった。なぜ、ガットマン・スケールを再現できなかったのかを理解するために、続いて課題通過率の分析を行った。

通過率に年齢、性別、課題内容のうちどの要因が関与しているかについて χ^2 分布を利用した分散分析で検討したところ、日本の調査結果においては年齢の有意な主効果が認められ、5歳児や6歳児の通過率は4歳児よりも有意に高いことが示された。また、課題の主効果が有意で、主観的欲

求課題の通過率は他の課題に比べて有意に高く、知識アクセス課題の通過率は誤信念課題よりも有意に高かった。したがって日本の子どもでは、課題内容は関係なく、4歳の子どもよりも5歳・6歳の子どものほうが心の理論課題を通過しやすいことが明らかになった。また、日本の子どもでは主観的欲求課題は明らかに他の課題に比べて容易であった。知識アクセス課題と誤信念課題は同じく他者がターゲットを見ているかどうかを基盤として答える課題であるが、誤信念課題は知識アクセス課題に比べて難しいことが明らかになった。一方、スリランカの調査結果では有意な主効果や交互作用は認められなかった。4歳から6歳という年齢差や課題内容の違いが通過率に関与する可能性が期待されたが、特にそのような結果はスリランカの調査データには見受けられなかった。本研究では通過率について日本とスリランカで統計的な比較・分析しなかったが、Table 2・3の通過率の課題平均をみると、日本とスリランカの双方において主観的信念課題と誤信念課題の値が低いことが分かる。近年、日本の幼児は欧米の子どもと比べて心の理論課題に正答する年齢が遅れることが示されている（Naito & Koyama, 2006; 東山, 2007; Wellman et al., 2001）。Naito & Koyama (2006) や東山 (2007) は子どもの回答に対する理由づけの分析から、言語環境における日本と欧米の違いが心の理論の発達に関与することを指摘している。例えば東山 (2007) は、“考える”や“知っている”といった心的動詞の日常会話における使用頻度が日本では欧米に比べて少ないことが日本の子どもの心の理論課題への正答の発達の遅れに関係しているのではないかと考察している。言語構造や特定語彙の使用頻度について日本とスリランカでどのような違いがあるのかを今後検討しなければならないが、スリランカの子どもでも主観的信念課題や誤信念課題の成績が低かったのは“考える”や“知っている”といった心的動詞の日常会話における使用頻度が少ないことに由来しているのかもしれない。

結局のところ、課題通過率の影響要因の分析結果のみでは、本研究がガットマン・スケールを何故再現できなかったのかを明らかにすることはできなかった。これについてはなおも引き続き検討

する必要があるだろう。

日本における子どもの心の理論課題の通過と母親の愛着スタイルの関連について

まず、日本においては、母親の愛着スタイルが安定型であるほど、その子どもは誤信念課題を通過しやすいことが示された。この結果は、愛着安定型の母親が具体的に子どもとの間でどのようなやりとりを行いやすいのかは分からないまでも、愛着安定型の母親がある特定のやりとりを通じて自分自身の捉え方とは異なる他者の誤った信念を推測できるような方向に子どもの心的理解を促した可能性を示唆する。Fonagy et al. (2002) によれば、愛着安定型の子どもは安心して養育者の行動からその心的状態を読み取ることができるため、他者が自己自身をどのように感じ取っているかの理解も進み、自己自身の心的状態と結びついた形で他者の心的状態を理解する能力が発達するという。愛着安定型の母親は子どもに安心できるやりとりをもたらすとともに、子どもにそのような心的理解を促し、子どもは自分自身とは異なる他者の信念を推測しやすくなったということがあるかもしれない。

一方で、母親の愛着スタイルが回避型であるほど、その子どもは誤信念課題を通過しにくいことも示された。実際に回避型の母親が子どもとの間でどのようなやりとりを展開しやすいのかは本研究では特定できないが、回避型の母親はおそらく子どもとのやりとりを避ける傾向が強く、子どもが母親の心的状態を読み取ることが困難にさせるということは考えられよう。また、回避型の愛着スタイルの母親の子どもが実際に回避型であったかどうかは本研究では調べなかったが、Fonagy et al. (2002) は、回避型の子どもは養育者の心的状態を遠ざけようとするために、養育者の心的状態を読み取ることある程度困難であろうと論じている。回避型の母親は子どもとのやりとりを遠ざけてしまい、子どももそのような母親とのやりとりを避けがちになり、結果的に子どもは母親だけでなく他者一般の心的状態をも読み取ることが困難になって誤信念課題の理解が難しくなるということはあるかもしれない。

さらに、母親の愛着スタイルが恐れ型であるほど、その子どもは誤信念課題を通過しにくく、ま

た多様な心の理論課題を通過しにくいことが示された。愛着スタイルが恐れ型の母親は自分に自信がない一方で、愛着を恐れたり対人的なやりとりを回避しやすく (Feeney & Noller, 1996)、そうした母親は子どもに対しても回避的であるがために子どもは母親の心的状態を読み取ることが難しいということがあるかもしれない。そして結果的に、他者一般の心的状態を推測しにくく、心の理論得点が低かったり誤信念課題を理解しにくかったりしたのかもしれない。

スリランカにおける子どもの心の理論課題の通過と母親の愛着スタイルの関連について

他方のスリランカの結果は日本とはかなり異なるものであり、まず、母親の見捨てられ不安が強いほど、その子どもは主観的信念課題を通過しやすかったり心の理論得点が高かったりした。見捨てられ不安の高い母親が実際にどのような振る舞いを子どもに向けやすいのかは本研究では明らかでないが、そうした母親は自分自身に注意が向かい子どもの心的状態を敏感かつ適切に読み取ることが難しいということはあるだろう。また、気分や感情の変化に応じて子どもへの注意や読み取りあるいは養育行動は変化して一貫しない可能性もあるだろう。Fonagy et al. (2002) は、子どもに怯えまた子どもを怯えさせるような養育者をもつ無秩序型の愛着の子どもは自分自身の安心を確保するために養育者の心的状態に極めて敏感になり養育者の行動を予測しようと努めるため、他の安定型、回避型、抵抗型の子どものとは異質な形で他者の心的状態を読み取るスキルを獲得していくと論じている。見捨てられ不安の強い母親が無秩序型の愛着形成を促すのかは分からないが、そうした母親が自分自身に注意を向けやすく子どもへの対応が気まぐれで一貫しないのだとすれば、子どもは母親の行動を予測しようとしてその心的状態に敏感になり、ひいては他者一般の心的状態の推測も得意になっていくということはあるかもしれない。この結果に関連して、母親の愛着スタイルがとらわれ型または恐れ型であるほど、その子どもは主観的欲求課題や知識アクセス課題を通過しやすく心の理論得点も高かった。とらわれ型の人も恐れ型の人も自分に自信がなく否定的で感情的に不安定であるところを共通点としてもっている

(Bartholomew, 1990; Feeney & Noller, 1996)。そうした特徴を母親がもっていれば、子どもへの対応は感情によって変化しやすく一貫しないため、子どもは母親の心的状態を敏感に読み取ってその行動を予測しようとするのではあるのではないだろうか。そして、そうした母親との関係のなかで他者一般の心的状態を読み取るスキルを高め、結果として主観的欲求課題や知識アクセス課題の成績が良く、心の理論得点も高くなったということはあるかもしれない。

その他に、母親の愛着スタイルが安定型であるほど子どもは見かけの感情理解課題を通過しやすいという結果が示された。Adam, Gunnar, & Tanaka (2004) の研究報告によると、他の愛着スタイルに比べて、愛着回避型の母親はポジティブな情動経験が少なく、愛着とらわれ型の母親はネガティブな情動経験や不安が強く実際の行動面でも怒りを表出しやすく子どもの心情に配慮なく介入したり接触を求めたりしやすいという。翻って言えば、愛着安定型の母親の情動経験はポジティブな情動とネガティブな情動のどちらにも開かれており、子どもが経験する様々な情動に対しても防衛なく受容することができるものと思われる。そして、子どもはそのような母親の対応のもとで感情やその表示規則に関する知識やスキルを学んでいくために、結果として見かけの感情理解課題の成績が良かったのかもしれない。

母親の愛着スタイルとの関連性における日本とスリランカの違いについて

母親の愛着スタイルとの関連性について相関の有無あるいは相関の正負という点で日本とスリランカの違いをみると、まず、日本では母親の愛着スタイルの回避型の強さは子どもの誤信念課題の理解を難しくする方向で関与しているが、スリランカでは特にそうした関与は認められなかった。回避型の母親は子どもとの心のやりとりを避けるような養育行動をとる傾向にあると思われる、それは母親の心的状態だけでなくひいては他者の心的状態の理解の発達を妨げ、日本での結果に見られるように子どもの誤信念課題への理解を難しくさせるということはあるかもしれない。一方、スリランカではそのような関連がみられなかったのは、その関連を媒介するようなスリランカに固有の要

因が存在して見かけの上で関連がなかった、あるいはその関連を弱めるようなスリランカに固有の要因が影響していたためかもしれない。

また、スリランカでは母親の愛着スタイルのとらわれ型や恐れ型の強さは子どもの心の理論課題の理解を促す方向で関与していたが、日本では特に母親の恐れ型の強さは子どもの心の理論課題の理解を難しくする方向で関与していた。またその結果に関連して、とらわれ型と恐れ型に共通する母親の見捨てられ不安の強さはスリランカでは子どもの心の理論課題の理解を促す方向で関与していたが、日本では心の理論課題の成績との関連がなかった。スリランカにおいて母親の見捨てられ不安の強さやとらわれ型や恐れ型の傾向の高さが子どもの心の理論課題の理解を促す方向で関与していた背景には、先でも述べたように、母親が感情的に不安定で子どもへの関わりが一貫していないために、子どもは母親の行動を予測しようとしてその心的状態を読み取ることに努めざるを得なかったということがあるのかもしれない。しかし、日本では母親の恐れ型は子どもの心の理論発達を阻むような方向で関与しており、スリランカの結果とは異なるものであった。これは、同じ恐れ型でも子どもに対する関わり方がスリランカとは異なるところがあるためかもしれない。例えば、スリランカでは恐れ型の母親は子どもに対して一定の関わりはあるが、子どもに混乱を招くような表出・行動が多く、子どもはそこから目を離すことができず母親の心的状態を巧みに読み取る必要があるのかもしれない。一方、日本では恐れ型の母親は感情的に引きこもりやすく子どもとのやりとりも抑制的で少ないため、子どもは母親の心的状態を読み取ることに無力になっていくのかもしれない。

母親の愛着と子どもの心の理論発達との関連について、本研究ではどのような媒介変数が介在するのか、あるいはどのような調整変数が影響しているのかを検討しなかった。それゆえに、日本とスリランカの違いに関する今回の考察は推論の域を出ないものであった。また、本研究では、日本とスリランカの文化的な差異や言語環境の違いについて事前に考究することなく調査したために、具体的な仮説の想定もなく考察の内容が不確かな

ものとなったきらいがある。久崎 (2012) でも述べているように、今後はまず、母親の愛着スタイルと子どもの心の理論発達との間に、適切な媒介変数、すなわち子どもとのやりとりに関わる養育者の特性やそのやりとりの特徴を組み込んで調査・分析する必要性は避けられない。また、心の理論発達に対する養育者の影響についてスリランカと日本での違いを詳細に検討するためには、それぞれの国で母親の愛着スタイルから子どもの心の理論発達への影響経路に対してどのような媒介・調整変数が働くのかを想定しなくてはならない。

謝 辞

本論文の作成において愛知教育大学の船橋篤彦先生 (現 広島大学大学院教育学研究科) および学内査読者の先生に貴重なご示唆をいただきました。ここにお礼を申し上げます。

引用文献

- Adam, E. K., Gunnar, M. R., & Tanaka, A. (2004). Adult attachment, parent emotion, and observed parenting behavior: Mediator and moderator models. *Child Development, 75*, 110-122.
- Baron-Cohen, S., Leslie, A. M., & Frith, U. (1985). Does the autistic child have a "theory of mind"? *Cognition, 21*, 37-46.
- Bartholomew, K. (1990). Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships, 7*, 147-178.
- Chasiotis, A., Kiessling, F., Hofer, J., & Campos, D. (2006). Theory of mind and inhibitory control in three cultures: Conflict inhibition predicts false belief understanding in Germany, Costa Rica and Cameroon. *International Journal of Behavioral Development, 30*, 249-260.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹 (2000). 日本人母子における愛着の世代間伝達 教育心理学研究, 8, 323-332.
- Feeney, J. A., & Noller, P. (1996). *Adult attachment*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Fonagy, P., Gergely, G., Jurist, E. L., Target, M. (2002). *Affect regulation, mentalization and the development of the self*. New York: Other Press.
- Fonagy, P., Redfern, S., & Charman, T. (1997). The relationship between belief-desire reasoning and a projective measure of attachment security (SAT). *British Journal of Developmental Psychology, 15*, 51-61.
- Harris, P. L., Johnson, C., Hutton, D., Andrews, G., & Cooke, T. (1989). Young children's theory of mind and emotion. *Cognition and Emotion, 3*, 379-400.
- 東山 薫 (2007). "心の理論" の多面性の発達 - Wellman & Liu 尺度と誤答の分析 - 教育心理学研究, 55, 359-369.
- 久崎孝浩 (2012). 心の理論発達と親の愛着スタイルの関連性 応用障害心理学研究, 11, 69-79.
- Meins, E., Fernyhough, C., Russell, J., & Clark-Carter, D. (1998). Security of attachment as a predictor of symbolic and mentalising abilities: A longitudinal study. *Social Development, 7*, 1-24.
- Meins, E., Fernyhough, C., Wainwright, R., Das Gupta, M., Fradley, E., & Tuckey, M. (2002). Maternal mind-mindedness and attachment security as predictors of theory of mind understanding. *Child Development, 73*, 1715-1726.
- Ministry of Human Resource Development, Education & Cultural Affairs, Sri Lanka. (2004). *Education for all: National action plan*.
- Naito, M., & Koyama, K. (2006). The development of false-belief understanding in Japanese children: Delay and difference? *International Journal of Behavioral Development, 30*, 290-304.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). "一般他者" を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- Ontai, L. L., & Thompson, R. A. (2002). Patterns of attachment and maternal discourse effects on children's emotion understanding from 3- to 5-years of age. *Social Development, 11*, 433-450.
- 小川 絢子 (2011). 心の理論と実行機能の関連に文化はどのように影響するか: 比較文化研究からの示唆 京都大学大学院教育学研究科紀要, 57, 463-475.
- Repacholi, B. M., & Gopnik, A. (1997). Early reasoning about desires: Evidence from 14- and 18-month-olds. *Developmental Psychology, 33*, 12-21.

- 清水由紀・坪川紅美 (2007). 幼児教育分野のアジアの途上国の実態調査 (スリランカ) 幼児教育分野におけるアジアの途上国の実態調査とネットワーク形成 (平成16-18年度科学研究費補助金基盤 (B) (代表 内田伸子) 研究成果報告書), 86-99.
- 篠原郁子 (2011). 母親の mind-mindedness と子どもの信念・感情理解の発達：生後5年間の縦断調査 発達心理学研究, 22, 240-250.
- Symons, D. K., & Clark, S. E. (2000). A longitudinal study of mother-child relationships and theory of mind in the preschool period. *Social Development*, 9, 3-23.
- Van IJzendoorn, M. H. (1995). Adult attachment representations, parental responsiveness and infant attachment: A meta-analysis on the predictive validity of the Adult Attachment Interview. *Psychological Bulletin*, 117, 387-403.
- van IJzendoorn, M. H., & Kroonenberg, P. M. (1988). Cross-cultural patterns of attachment: A meta-analysis of the strange situation. *Child Development*, 59, 147-156.
- Waters, E., & Deane, K. (1985). Defining and assessing individual differences in attachment relationships: Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50 (Serial No. 209), 41-65.
- Wellman, H. M., Cross, D., & Watson, J. (2001). Meta-analysis of theory-of-mind development: The truth about false belief. *Child Development*, 72, 655-684.
- Wellman, H. M., & Liu, D. (2004). Scaling of theory-of-mind tasks. *Child Development*, 71, 895-912.
- Wimmer, H. & Perner, J. (1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, 13, 103-128.
- (2014. 1. 4受稿, 2014. 1. 31受理)

The relation between preschoolers' developmental level of theory of mind and their mothers' attachment style: A comparison between Japanese and Sri Lankan data

Takahiro HISAZAKI

This study examined the difference between Japan and Sri Lanka in the relationship between preschoolers' developmental level of theory of mind and their mother's attachment style. One hundred and thirty one Japanese children and 70 Sri Lankan children tried to carry out a series of 5 tasks of theory of mind and each mother completed a questionnaire on her own attachment style. Sri Lankan children's developmental level of theory of mind significantly correlated with higher anxiety and preoccupied attachment in their mothers, but there was no such relation in Japan. The significant relation between children's developmental level of theory of mind and fearful avoidant attachment of their mothers was positive in Sri Lanka, but it was negative in Japan; This finding suggests that Sri Lankan mothers with fearful avoidant attachment would tend to provide emotionally confusing interaction with their children, but Japanese mothers with fearful avoidant attachment would be more emotionally/behaviorally suppressive.

Key words: theory of mind, preschooler, Sri Lanka, mothers' attachment style, fearful avoidant attachment